

レディ・ジョーカー

2004(平成16)年12月26日鑑賞〈道頓堀東映〉



監督＝平山秀幸／原作＝高村薫／出演＝渡哲也／徳重聡／吉川晃司／長塚京三／菅野美穂
(東映配給／2004年日本映画／121分)

第4章

SHOW・HEYお得意の社会派映画

……高村薫のベストセラー小説『レディ・ジョーカー』の映画化だが、小説と映画のどちらがよいか、となると……？ グリコ・森永事件(84年)はるか昔の出来事であるうえ、「被差別部落問題」などは、今の若者にはその問題点はおろか、言葉さえわからないのでは？ 犯人側、被害者側、捜査側を形成する個々の登場人物はそれぞれに魅力的だが、2時間枠での映画化にはやはり無理があるよう……？

物井清三とはどんなヤツ？

渡哲也演ずる主人公の物井清三^{ものいせいぞう}は、今から約50年前の昭和22年に日之出ビールを不当解雇された物井清二の弟。今は、日之出ビールの本社ビルが見える東京の下町で小さな「クスリのモノイ」を営んでいる。青森県の被差別部落の出身、兄の不当解雇と老人ホームでの彼の死亡、そして今また、孫の秦野孝之が日之出ビールで不採用とされた直後にバイク事故で死亡したと知った清三は、「何かをやらなければ」との思いが……。この清三が描いたシナリオは、数名の競馬仲間とともに日之出ビール社長の誘拐という途方もないものだった。

狙いはお金か、復讐か、それとも……？

この映画では、昭和22年に日之出ビールを不当解雇された清二が、会社宛に出した抗議文が、平成16年に至って大きな意味をもつことになる。そして、清二の解雇をめぐるのは、昭和22年当時の取締役会議事録まで登場する。しかし弁護士の私の目には、商法上10年間は本店に備え置くべきと規定されている(商法260

条の4第5項)取締役会議事録が、ホントに50年間も保管されていたのかな、と思う面も……。

日之出ビールの社長、城山恭介(長塚京三)に目隠しをし、口にガムテープを貼って誘拐した犯人たちの要求は5億円の現金。ところが、犯人たちはこの金を受け取らないまま社長を釈放し、「次の人質は350万キロリットルの日之出ビールの商品だ」と告げたうえ、「要求金額は20億円、ただし警察には5億円と伝えること」という「裏取引」の話をもちかけた。清三を中心とする犯人たちの狙いは一体何なのか? 複雑な様相を呈したこの事件の捜査が難航したのは当然のこと……?

面白い犯人たちの人物像

パンフレットには、原作者、高村薫氏の寄稿文が載っている。これによると、『レディ・ジョーカー』を執筆した1990年代半ばは、日本中が暗く沈んでいた時代であったため、この小説の登場人物は、犯人グループも被害者企業もそれぞれその時代を必死に生きていた人間たちであり、結果としては「被害者も加害者もなく、最後に笑った者は1人もいない無残な事件」と書いてあるのが非常に興味深い。1984年に発生した「グリコ・森永事件」をヒントにしてこの小説を書いたとのことだが、日之出ビールの社長を誘拐する清三を中心とした犯人グループの人物像はそれぞれに興味深い。ここではその1人1人を解説しないが、是非この映画でそれを十分味わってもらいたいものだ。

現職刑事も実は犯人!

あっとビックリ、驚くのは、この犯人グループの中に、蒲田中央署刑事課強行係の現職刑事、半田修平(吉川晃司)が加わっていたこと。そしてこの半田は、「日之出ビール社長誘拐事件特別捜査本部」の一員として警察の組織あげての捜査を「楽しんで」いたことがよくわかる。グリコ・森永事件は「劇場型犯罪」と呼ばれ、「愉快犯」という言葉を定着させた挙げ句、迷宮入りしてしまったが、それを象徴する人物がこの半田。若き熱血刑事、合田雄一郎(徳重聡)と対比してみれば、刑事像にもさまざまなものがあることがよくわかる。また、この半田

に任意出頭を求めるという方針が決まったことにショックを受けて、拳銃自殺をする元上司の外波山文明（土肥正行）の無念さや痛ましさを心に響く。この映画では、このようにさまざまな人物像が実によく描かれている。

レディ・ジョーカーとは？

ジョーカーはトランプのジョーカーのことだが、トランプには「ババ抜き」というイヤな(?)ゲームがある。この映画の「影の主人公」は「レディ」と呼ばれている車椅子の娘。彼女の存在が犯人グループによる誘拐事件の大きな動機になっていることは、犯人グループが自らを「レディ・ジョーカー」とネーミングしたことからもよくわかる。この少女は犯人の1人である布川淳一（大杉漣）の娘だが、競馬場で布川が、運に恵まれない自分の境遇を「ジョーカーを引いたみたいだ」と自嘲気味に言ったことがそのルーツ。この車椅子の娘は映画の中では一言もしゃべることはないが、清三との心の触れ合いと「対話」をみていると、さまざまな人間の悲しみや怒りが凝縮されていることがよくわかる。映画のつくり方としては出色だと思ったが……。

小説をとるか？ それとも映画をとるか？

ベストセラー小説の映画化は難しい。特に、先に小説を読んでいる人が後から映画を観ると、「何だ、こんな程度か!」と思ってしまうことが多いもの。そしてそのベストセラー小説が短編ではなく大作であればあるほど、その傾向も強くなる。それはやむをえないことだろう。なぜなら、小説は何百頁も読みながら、読者がそれぞれ頭の中でさまざまな像を思い描いていくのだから、奥行きも広がりもあるのが当然。そして、複雑なストーリーで多様な人物が登場するほど面白くなり、のめり込んでいくもの。しかし映画は2時間枠に収めなければならないため、どうしてもテーマを絞らなくてはならなくなり、抽象的かつ印象的に観客の目に訴えなければならなくなる。さらに登場人物が多くなりすぎると、ストーリーをまとめるのも難しくなる。本作は、「映画化は絶対に不可能」と言われてきたこの原作をあえて映画化したもので、それなりによくできているが、やはり小説には勝てなかった、と言わざるをえないのか……？

企業の不祥事は昔も今も……？

日之出ビールの代表取締役は誘拐された城山恭介だが、副社長兼事業開発本部長は白井誠一（岸部一徳）、副社長兼事業本部長は倉田誠吾（清水紘治）、そして取締役兼事業副本部長の城山武郎（辰巳琢郎）は、恭介の実の弟。したがってこの日之出ビールは、城山家一族と、白井、倉田らの外部の血が微妙に入り交じった由緒ある会社というわけだ。しかし、この日之出ビールは、総会屋である岡田経友会と黒いつながりがあり、つい最近10億円の「手切れ金」を支払ってやっと縁を切ったとのこと。したがって、今回の誘拐事件はこの岡田経友会には関係なしと信じていたものの、万一の可能性も……？

また誘拐された本人の恭介社長は、真の人質が自分自身か、350万キロリットルのビールか、それとも他の大切な何かなのかを考え、結局は役員会で、犯人グループに対して20億円を支払うことの了解をとりつけたばかりか、犯人グループとの裏取引にも応じることに……。しかし、その挙げ句、副社長として会社の実権を握っていたと思われる白井と倉田は、会社を守るため（?）、ある日突然態度を一変し、恭介社長を背任罪で告訴することに。この小説は1990年代半ばの、日本企業が全然元気のない時代に書かれたものだが、土地バブルの時代もデフレ不況の今も、日本の企業のモラルの無さや不祥事はいつも同じ。この原作から10年経った今年の大ニュースは、西武鉄道の有価証券報告書への虚偽記載問題。これは西武鉄道が、堤一族が支配するコクドなど大株主の株式保有比率を過少報告していたというもので、西武鉄道はこれによって上場廃止という事態にまで追い込まれることに。

2004年春に発覚した、総会屋への利益供与による商法違反事件を含めて、西武鉄道の企業体質そのものが大問題となり、遂に堤氏は西武グループの全役職を辞任するに至ったが、それによって問題が解決したわけでないことは当然。

企業の不祥事は、昔も今も……？

2004(平成16)年12月28日記